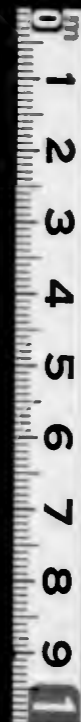


藩鑑

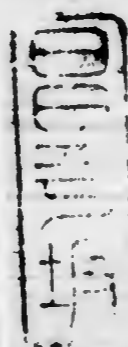
紀伊殿

七



内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (9)
函號	159 1

内閣文庫	
三五五 一上架	二八〇冊 三四六八號
和書	



藩鑑卷之九目錄

紀伊殿

權大納言源賴宣卿



藩鑑卷之九

紀伊殿

源頼宣卿

一 東照宮天下統一統の後、在歳七十、
忠を給へり、正他界まで、毎日馬を
召し、在鉄炮を之、發、在弓、的、卷、業、を
定め、在、在、武門の、在、勤、有、を

頼宣君は幼少より御覽し習ひ武
の道須臾も油断なく茶道は古田
織部は能亂舞は觀心思雪金春去
夫は奥の義を御聞ありしつとて
昧き事なく常々近習の軍は六
人の目ありものもかくは居るに偏
るは思ふ人のときあり

武士の櫻物して帰るさかい

屋さし〜見ゆる花胡簾式

此歌の公は勇を指し〜と常は

此示しありは
紀州頼宣は言行孫
南龍君遺事

一 安茂帯刀直清若年の時早馬を高
直は之足まう〜求て朝夕馳を〜は
由頼宣は御聞御事〜召れ御意は早
馬を秘藏すも、馬數考の第一あり
能れとも早馬は傍軍の先を〜は

ひて先陣を載へためあり是ハ一
騎合の武士の馬好あり國主一
大將の馬好ハ一家中れを勢の馬廻
りとも面こみ馬を持やうよ身の上り
きふぬやうよ一馬持の多きやうよ
すうの國主一馬の大將の馬好あり一
名の大將番頭我一人早うよ馬
たりとも諸士組子の馬弱りて我一人

の馬早くても後よえき家中組子馬
を能持やうよ下こを養ひそて
をハ大將家老番頭の馬教考と上
物ありと作りる祐生木庵を召れ漢
の文帝々千里の馬を受給ひさる不を帝
刀よ讀て聞せよと注意あり木庵則通
濫を持出有_下献千里馬者文帝曰鸞旗
在前屬車在後吉行日五十里師行三十

ていひあつていふも然くもあつていふも
少しよても夢あつて一茶道を知されい
不骨よしつゝさあふと下鴈立よ見ゆら
まゝ、然離子知されいたとく然の吐小
るよも初いたせやまて二番目ハ是異ニ
番目ハ何ぞん鬼の出たら杯と中族多
し一人の笑を得る媒あり殊よ歌道
を知されい歌物語よ譯も筆よ片云

を吐し出し一座の朝よ成るる武藝
ハふに及をを何事も知て悪事事あ
しされとも人の癖よて一方ハ片付ふ
かり武道のい公知てい其外を知り
又花奈あち道をしすく者ハ弓弓の第
一の事ようとし何事よも片よいぬら
人の道あり此段有子極方ハ中上と
市意あり 同上

一 遠山の某、節目と申す才智と申す何役
も作付られても器量有る人ありと
蘆川十休執成、申上る頼宣君取合
たなく三度目も作られぬ我ながら
物言程の輩、遠山を譽ぬ者あり皆
も然人と譽られぬ人も偏り悪まる人
ハ一癖有る人あり釋迦老子孔子も
一世の人も或は譽られ或は悪まれか

り遠山の輕薄論諛の徒者あり忠義の
人も非ず或は譽られ或は譽るる人も
能者有る孔子の庇悪う、必察庇好
う必察す人も誰うされ然人と思ひ
悪人と思ふ人も是大将の心を附
き不かりとぞ 同上

一 頼宣卿の趣、申上る味強く是あり
小落合十兵衛秋より大和柳を野へ

春に成八九月の柳の如く新葉有ら
を其下に積素山次郎右衛門を以て進
上せし事を見聞ぬれば一切の稱賛を
く十兵衛かといふ番頭を中付れし軍
用の品こそ公を盡しし組子をあらけ
人馬を拵只今もも急用よま公を
端々道に公知てこそ有る事此柳に
公を盡しし積を忠す事何事の用

そかやうの事ハ代官庄屋本との談事
あり樊遲り稼を夢しと問たれハ孔
子の老圃よ如くと恥しめ小人ありと
談しめ終いき我家の番頭をもす
者の公のくる不遠なりと散らぬ
此柳を披露したる素山も同穴の狐
ありたし那みゆへとの御意より赤面
して立ける 同上

一 三百石より士々の代金にありて掛物を
買けりるを亦聞かざされ云用の費被
ししかと穿鑿ふあり亦目付を以亦聞
ゆより必定ありと書上る重て人馬兵具
武具の嗜ハ有ゆやと亦尋吟味の上馬
も常より然る物具ト人丈支も持武
道の公掛さる有ハ其上ハ掛物茶湯慰
も悪なりぬ事又他の客も来る床も

何も知れたといふ知るといふも之社の託宣
も知りまぬおあり家中の外聞おれ
墨跡繪賛のおも求たるとして苦く
申さるるをいふ道ぬ極まとの物意あり上

一 寛永十一年甲戌の夏

大猷院様由上洛の若尾張大納言殿
作られし江戶へ歸山時尾張名護屋
へ由立お申休息所さるる一と作書

是の尾張様水湍足りて水成柳殿を作
付たりし時江別佐和山の城にて

公方様思召よかたは子多品是あり水用
公の水思案出井伊掃部直孝も既
減却有くも梶子の不も忠孝の仕方よ
く思召れ也幸淋かやりの事よて
直に江戸へ水帰り有りと作さき
名護屋の城へ水成来されし尾別

もも数日の水用意もいふとあり天
下の外聞を共ひにや尾別ハ立ぬと
思召誥頼宣卿へ水叫出ハ此度の儀ハ
天下の外聞恥辱をかきし官尾別ハ
籠城安否を極むとと水申其年
ハ尾別ハ糸府の答紀別ハ京より水帰
國の定あり頼宣君尾張殿水公底を
聞召れ水流をたゞくと水流一勿

辨亦き思百五^よ山亦自分我等ハ天下
の如^める

権現様亦遺言成され^ゆさや^うの思
召立中^と道理^よ遠^ひ中^の山名護屋亦
成の止^ゆも依和山の幸^{より}御用^公
聞^え山唯何^とを^く江戸^へ供奉^成され
亦^た立^たる^一と亦^いさめ成^{され}ゆ^も
尾張様^よハ兔角尾^別亦引籠^り亦

敵^對子思召極^ゆとの幸^{あり}頼宣君
聞^えられ^必定思召極^りゆ^もの山籠城^の
亦^も立^たる^一と亦^いさめ成^{され}ゆ^も
も尾張一^別亦^も日本六十五箇國^を
亦^も引籠^り亦^も御利運^是あ^まり^まり
と^かく亦^も謀^叛子極^りゆ^も成^{され}振
有^一く^ゆ下^下鵜^の諺^子毒^を喫^ハ血^を
舐^と中山思召^立程^{あり}ハ大^功を^顯

ハされぬ極ニ成さるべく
公方様尾州を此通過し時分名護屋
より無人敷を直連追討ニ成されぬ
其時ハ我等も執州より吉田へ紫渡
此自分と力を合せ追討ニ致しぬを
今切白須賀近邊よりハ
公方家亦止中へく此在京の帰是上下
油断の旗本執何万も此と名足此

もかり中召安し不意を追おれぬを
一擧ニ大功を立て天下の落去一日ニ
定る處へ若討損へ漏へぬを御自
分我等討死を遂枕を並へく
徳小名護屋ニ籠城へ巻詰られ腹
切後人事未代の恥辱ありと此眼を
いふ一症を亦て作られけれハ尾張
横も及理小内詰り志向へ此成念至

極成等ハ當人トテ滅亡是紀亦クハ
とも答え奉る貴殿を弔いと討死
させ両家を潰し

権現様亦遺言を承り仕置安易方堅く
思ひ入り終へしあり頼宣ハも亦喜院
潰し

公方様より江戸市帰城頼宣君より
紀州市帰國尾張様より名護屋市

市帰城廿日過て江戸市系亦市登
城亦目見出得ハ

大猷院様亦氣色替り尾州亦系勤延
引有(き)括(く)聞(き)し亦早く(き)り(き)さ
れ(き)若(わ)定(ぢ)引(ひ)か(き)ハ(き)崎(さ)海(う)口(ぐち)ま(り)て(き)亦(も)追
亦(も)系(けい)亦(も)急(い)く(き)と思(おも)ひ(き)し(き)ひ(き)り(き)り(き)上(かみ)
意(い)亦(も)あり(き)し(き)と(き)同(どう)上(かみ)

一 嶋原蜂起の時亦三人市登城大名亦

旗本功者の面々登城あり尾張大納言殿直意より百姓との分より何程の事有へまふこつふよりまをりてあましく作られし頼宣君はさやうよく是をくし古の諺よも外の百人を石内の一人を窺うとくし中し二万をかりの凶徒等死を極め楯籠しをそとに成りし中へくし殊よ天草富岡城攻本渡合

戦の仕方嶋見志垣よての勢配王唐津表より陣拂の辨河原よては漸く野合戦よ杉谷表の兵糧争の辨百姓をりりの仕方と存せずし何れも入り中へくしと作られし尾張殿作られし紀伊國殿又むいっくは挨拶中しれし何事一の是あまき一と踏殺捨中へくしと有防真田伊豆守信幸中され

此ハ軍の儀ハさやうハ座あり
父安房守思幸由意ト遠シ

権現様より由譜代一歴一
一万五千にて
信別上田城ハ由取掛成され
我等ハ亦
三歳より父安房守先子
校ハ一戦も亦
勝亦ハ教を加賀川まで
追討ハ四百
左右首を取中由譜代
歴ハの證の
推付を見中由其時
の柝子尾別様家

老成瀬隼人存ハ
由拙者式了簡
由紀別様由意由存
在リ由トヤ
上りれ由得ハ尾張
様殊の外由せき
飲
され由柝子あり
はり 同上

一寛永十五年二月廿一日
夜修原の城
より黒田寺澤福島
守ハ夜討をもち
黒田忠之ハ前究竟
の兵數十人討
死ト江戸ハ江進
福島井樓ハ未カ

とを焼れ中、城方強しと告来り
此之家も下よ依て登城、諸大名皆来
此是ハ如何と有顔色あり、紀伊大納言
頼宣は此一人ハ是を此聞きて目出
度事、近日藤城仕へく、其上福島
井楼を焼く火のうけ、中城内も有
者とも、是を武勇のたけ知中、此と
作らる皆、うけぬ顔あり、追付藤城と

告来り、ゆゆ、諸人頼宣卿を深く感

一、なまあり、と、

武邊吐聞書 右談實孫
武家閑談 續武者物語

武家故事談

一、不代姫君尾張へ婚禮作せられたゆ、
寛永十六年、此秋と、一、此三家登城、此茶
の事あり、此祝儀作せ、其節、紀伊殿へ作出され
ゆ、此重て、女子出生ゆ、其許へ、婚禮作
付らる、く、此と、是あり、ゆ、此紀伊殿中

通りせ終りんよハ妻を脱く引のけ水を
おてこそある辱まよ何れも如妻を干
一通路を支る事奇怪あり一國の智
一の仁ハさハさ其のありと言はしを
頼宣は安路ひ治路中不志なりと
て夫より詮議ありて漢の水主米を
ゆるし給ひけれハ君も君たり君も
たりと人々中けり

常山紀談 南龍君遺事
紀別頼宣以言行録



一正保元年ハ明の崇禎十七年あり明朝
亂ま陝西の李自成あり云々の盜賊ハ
長とあり一揆をありハ京ハ攻入明の
天子も自縊して崩しけりハ福建の
鄭芝龍書簡をさしてけりハ加勢を頼
ハるよ依り頼宣ハ異國より加勢を頼
ハす事日本ハ武威四海ハ耀
ハるハ海ハ浪人を集めあんなハ教

十万も有る一夫も西國中國の大名も
名義加へられ徳る處も人拙者物大
弱も作付られゆを何事の悦り是も
人異國も攻入おもひ候よ日本の武勇を
見せ申すべし願ひなきれはとも
此加勢の事一止され兼て仕合せ
武功の者在法兵と一軍して老後
の思ひ出せんと勇みけり人々
の思ひ出せんと勇みけり人々

多事事一と一言あひけりとも 同上

一 大猷院様御代慶安三年の春頼宣君
在國の所尾張大納言義直は氣色
大幸よ及ゆ由下儀より申来り
月末は氣色の若尾張殿は氣色は公
許なきもつき二月は氣動在度と作
されゆりも遠別見付(在書)に
來尾張殿は氣色は路次迄在

此共紀別一紙帰作出されの通四月末
よ此系勤有一とふ上意あり是より
見付より一紙帰有(き)との所一紙出頭人
中根を改ち自筆より早に江戸(一)に
あがるととの

公方様此内意ありと申来り奉書
を改ち書中とハ格別の事也(一)之見
付よ此逗留相談色々あり渡邊若狭

中(一)此(一)大切の儀よての上(一)下(一)の(一)難題
と存し(一)たり(一)あり(一)吾等(一)の(一)存(一)し(一)き(一)改(一)ち
自筆(一)に(一)書(一)面(一)に(一)内(一)證(一)あり(一)奉(一)書(一)に(一)天(一)下(一)の
大法(一)あり(一)奉(一)書(一)を(一)用(一)ひ(一)て(一)内(一)證(一)よ(一)つ(一)き
此系(一)勤(一)め(一)たる(一)此(一)越(一)度(一)よ(一)為(一)成(一)く(一)は(一)只(一)公
道の(一)奉(一)書(一)に(一)任(一)せ(一)て(一)帰(一)出(一)得(一)と(一)仰(一)り(一)ら(一)は(一)た
と思(一)召(一)紀(一)別(一)一(一)紙(一)帰(一)り(一)出(一)され(一)ぬ(一)此(一)時(一)迄
儀(一)區(一)と(一)あり(一)此(一)共(一)若(一)狭(一)若(一)狭(一)言(一)此(一)聞(一)入

此歸り小段在旗本にては感し少く後
美少く老彼等内證小由隨ひ此系
勤小く此大事にて成るべき事あり

紀別頼宣に言行録
南龍君遺事

一 慶安二年五月七日尾張大納言義直
以逝去忌明て紀別大納言頼宣以水
戸中納言頼房に登城あり老中一對
一 紀別彦作られ此世度尾別殿病

中花よ死去の時度この上使忝も存せ
たは故ハ大納言病中に亦成り多し
と沙汰承り中々疑ひ末期に及ぶまで
我の兩人、彌出御あり一人の御返り出
一人の我より肩衣たりもおかけ女抱い
しりし末期に目見中生前の面目を
世人と待居し小出御あり事ハ恨み存
すりあり先年陸奥守政宗病氣を

末期より及ぶ時卿成あり是度への忠義
殊に古兵ありし出卿をあり又近年堀
田加賀守に盛大大病のとき卿成あり此
段合点年より此に盛大忠ありと

當君の取立より古き者よりもなり
各の相成りぬる執成よき也との事と存
るなり尾別は我兄あり平生横武者
より各に輕信ありき也との事執成、忍き

と見えたり然る簡ある處に尾別
は我こと遠ひ格別の士異國よりも大将
軍と指すゆい

大樹ある處に副將軍とす、誰れか
あまき、尾別あり副將軍病氣見廻
り

上將軍成せられたりとも後代の飛騨
よみある處より事ありと作られ

老中も理子伏し一玄の古族扱と及りハ
赤面しして唇を走しける

大樹ももみ石實子道理なりしと作ら

れりらととと 古老物語

一或時水戸黄門頼房卿尾張重相老友
以の同道より古見舞後と此其次より
西殿作らるるハ松の木基ハ天下の名
物なり

権現様より紀州殿市孫領と聞遂ハ
見中さるる一覽ハ不習とあり頼宣君
易き事と古語さして大幸の道具座より
て見せしハ人も不習より茶湯より御
目よぬしとして古書院より古茶の會お
り不宗作居出松の木基より古茶を煎
し古茶飲いて頼宣に作られしハ此茶
道ハ天下中真の名人千利休ハ曾孫より

して名をいふ宗依と申し勿論茶道
の達人よして其趣不も仰見知強り也
茶道よして天下の名家よして其趣
れい水戸尾張其趣もあつり及
い茶道よして天下無双の名家よして
初て對面本望のよして其族按宗依
一座の面目忝次第身よ解り退出仕い

紀別頼宣に云々録
南龍君遺事

一久野丹波方宗俊方(壺の口切)入せり
れい前日よ因別和乎相摸方光仲より
相談の由よい荒尾志摩系系よ其聴
よ達し明朝丹波方宅へ入成されり
也よ其相伴召連り也し但し久野
家の昔より武邊を習ふ較數考道具
不持致ましく荒尾は他家のよ
て晴あり渡邊若狭方不持の之幅一對

硯屏筆架軸の物拂子喚撞迄かゝり
下あり若狭ちりり道具糸ひさて入
れ相伴ハ荒尾志摩向日了二軒あり
れ會席ハ膳酒水花ハされれ茶の
時ハ亭主丹波方ハ茶あり兼テ千宗佐
ハ習ひ置ゆハハ武藝のこまハ列さ
れハハ茶前後に成丹波方も迷惑の辨
ハ見元志摩も了二モ笑止ハ存ハ頼宣

君熟トハ覽成されハハ志摩取れ
六の丹波方ハ先祖代ハ武藝の家ハハ
當家大功の忠臣の家あり祖父丹波
ハ八千五百石の身上めて能士をり分ハ
杖持ハたり大坂冬ハ陣ハハ之宅物若
徳ハ康貞相平紀伊方家依クハ丹波
宗政駿府ハ苗方あり其ハ陣ハハ我等
ハ加属作付ハるハ黒地ハ朱の二ツ

雁金の折魚の指物よて究竟のひし甲
五十磅鉄炮方其外一俣尾山を見る
如くは阿りしちりたて家癖よて茶
道をもの松葉ハ不調法あり兔角丹
波ガハ茶道を渡違一學よ頼りて作
らる一學出て丹波ちよ替り此茶を煎
し上丹波ち忝く存し顔色面に顯
れ出あり 同上

一 慶安四年

大猷院殿迄さそを終ひて其七月は江戸
より浪人由井正靈叛逆をたくみ紀伊
大納言殿の作と稱し判形を似せ謀書
を不こよ遣りし丸橋忠弥共之原又た市
川以下數百人徒黨し一俣鉄炮の藥莖の
本河川原十郎兵衛も是に共し埋
火もて遠くより火をさし徒黨の者

共私よて海上より出る時薬より火を後
て江戸を一時よ焦去とあふんと巧た
りしに公愛りしなるもの之人有て
訴出顯れしに丸橋を始め生捕られ
正雪、駿河宮井町より自害しけり
右の謀書を教通浪人共のをもとあり
けり也、大臣相集りて一大事と案
し、於ひとくく頼宣公を殿中言て此

書を出す外有らざる其時根子取し
くりあふに、亦も捕へしとて究竟の
兵を隠置て出仕を待たりしに尾張
中納言光友に水戸中納言頼房に出仕
あり此事を告りしに、尾張中納言
何條ゆゑ企有らむや、是謀書よて
あふんとありしに、水戸中納言も
いふに、さしあふんと宣ひし事あり

各々汗を振る所も頼宣に出仕あ
りて座まつき終ひしに井伊直孝酒
井忠勝松平信綱今度浪人共のたぐ
みの次第を中述しう知よ阿教忠秋彼
状を披露しう頼宣は残りに見張
ひて氣色亦とけくすも目出度こ
そゆ最早何の思ふ事もゆつに其子
細い彼徒黨の面々外極大名の判を佩

せ謀書を他たうんよ三代の直恩を忘
れ若や氣色ひいて謀教を止方との疑ひ
も有るまは我等の判を佩せられたる事也
へかく泣うたうあり切き

云方の直身ゆて若直疑ひも何んぬハ
我等は今國を差上いふも作子後ひ等
多し天下安全ありてこそあれ悦び
面子顯れ見えしとあるを初め一同

子慮し養むるものありてけられ、頼宣は
其浪人共の中、年壯の者四五人助け
置れよ、重て詮議有る處、き為ありと

宣ひ多しとて

南龍君遺事
常山紀談

一 駿府城下の傍に在家は建徳寺といふ
禪宗あり、頼宣は其のく、駿府に領地
の砌より目見、たたりたる出家僧は此僧は
常の出家とい遠ひ、何振物の用より立

居き、氣象のあり者をも、宣ひ其氣を入
て、おこれ、前へも出たりあり、紀別(得替
の後、も系勤、帰郷の、砌、彼僧、飛出、て、
八月、見、中、上、る、由、井、正、雪、一、亂、を、企、る、時、
建徳寺、に、急、き、紀、別、の、高、く、来、り、案、内、
を、中、入、る、用、人、共、是、を、安、て、い、く、成、用、事、
有、て、来、り、し、る、に、心、宿、に、何、方、も、是、ある、
か、と、尋、問、し、お、り、其、黄、昏、は、及、ぶ、僧、の、

曰外小何の用事も是なく而機嫌伺
ひみ孫越山宿もこれなく山極に是
と集る点仕ゆり是に仍ていふ
中いふみ出家なれはとて敵の機嫌伺
ひ中まうあるは所宿をも取案内も有
て中入局き起り暮よ及びて事かま
き辨不洞法成儀とつる局きとく長
屋を渡し休息をさせ支度用意中

付て市序の夜披露中(きと小役人
中渡しる時よ芦川甚又兵法とよ用
人いやく世建徳寺に常辨布施物を
て旦那を扱ふ坊主よあはれ何そと
いふ時、市用よ立(き)下の見不河に常
よ直意成さる即旅行の跡も正懇
成さねる俄(き)さ(き)付て来りたる
い(き)不審に止(き)延引よ及(き)今

宵の内より耳より達し能く相
談して其旨申上るるよしを
表の夜
詣引けり々と聞終ふと早速表へ出
給ひ建徳寺を早く出さしめて
近く召して近習の人を除かれいふ
る振子より集りたるそと聞終ふ時
は彼傍中上るに別儀ありし御前
に謀殺ありて其味方仕ふる由に雪忠

弥其黨の随一のよし風聞其隠し
座おくれ世殿中上座きたる系上侍
たるよしを述る仍て安夜帯刀をえ
しめ其夜より祈禱して居けり程
其因よりさやうの事不審なり是を
しといふも云儀より其旨の御座
の次第も各了簡次第一決して滞
る事なかりしとあり頼宣はのち眼

力を諸人感へ奉り古代に建徳寺
今以て御目をかけらるゝと紀別の者
此吐へあり 校合雜記



